

ぜんぶ催眠のせいだ

「こう見えて僕たち幼馴染みなんですよ」と最初の自己紹介で語っていた二人の後輩は、正直なところ、とても仲が良さそうには見えなかった。

にっこりと笑顔を浮かべる爽やか優等生タイプの上田と、無愛想でやや態度悪めな生意気タイプの上村。外見的にも性格的にも、とても一緒に過ごすような組み合わせには見えない。

実際、普段の学校生活では、一緒にいるところをあまり見かけないと周囲からも聞いているし、部活でもたまに話す程度で、二人でべったり過ごしているようには見えない。

だからこそ、幼馴染みとはいえ、そこまでの仲ではないんだろうなと思っていたのだ。

「下部先輩、いつも僕たちになんて言ってるか覚えてます？」

「……遅刻は、するなと」

「俺たちのこといつも叱っておきながら、アンタ今日遅刻したじゃないすか」

息びったり。さすが幼馴染み、なんだかんだでやっぱり仲が良いんだな……なんて。

他の部員たちは帰宅済で、俺たちの他には誰もいない部活終わりのロッカールーム。後輩幼馴染みコンビに囲まれながら、どこか上の空でそんなことを考えていた。

「聞いてます？」

「す、すまない、ちゃんと聞いてるぞ」

慌てて反応すると、再び二人に詰められてしまう。

たしかに、彼らの言う通りで、頻繁に遅刻してくる後輩たちのことを、以前より繰り返して叱っていた。しかし、それも、自分なりに彼らのことを考えたからこその部分もあったりして――

「違う、それはお前たちが毎日遅刻してきたり、せっかくポテンシャルはあるのに態度が良くないのがもったいないから、どうにか改めてほしくてだな……それに、今日は来る途中で道案内をしていたからで」

「そんなの俺たちには関係ないんすけど。あんな散々言っておいて、自分が遅刻してきたのは事実でしょう」

「あ、そろそろ戸締りしないと。先輩、また明日お話ししましょうか」
「いや、しかし明日は部活休の日で……」

「知ってますよ、でも部活休みでも、いつも一人で自主練してますもんね。明日は僕たちも自主練に参加しようと思うので、またそのときにでも」

たしかに、そろそろ部室を出なければならぬ時間だった。鍵束を手にしてひらひらと揺らす上田から鍵を受け取ると、荷物をまとめて肩にかける。

「……本当に、お前たちが、自主練するのか？」

「はい」

「そうか、それはそれで嬉しいな」

部活休の日に、半強制で後輩に予定を組まれたことも、本来ならば注意すべきことではあるのだが、それよりなにより、あのサボり魔な後輩たちが自主練に参加してくれることへの喜びの方が勝っていた。

もちろんこのときは、翌日にあんなことが起きるなんて、微塵も考えはしなかったのだ。

翌日。約束通り、休みで人気のない部室に足を運ぶと、俺が到着するよりも先に、すでに後輩二人が待ち構えていた。

普段の部活の日も、これくらい余裕を持って来てくれればいいのに、と思わ

ず言いかけたのだが――

* * *

「あっ、んっ、もう……っ」

「自分から腰振っておいて何言ってるんすか」

「だって、それはお前たちが……っああ」

練習着に着替えようと下着一枚になったところで、後輩たちに羽交い締めにされて、あれよあれよという間に拘束されてしまった。両手首を後ろ手で縛られて、下着まで脱いだ状態で立たされた俺は、村上が手にするオナホール目掛けて、必死に腰を振っている。

「そうやって、僕たちのせいにならないでくださいよ」

「こんなことっ、お前たちが言うから、やってるだけだっ」

「言われたからって、ふつうは後輩が持ったオナホめがけて腰へこへこしなくないっすか？」

オナホールの一番奥まで到達するように腰を突き出して、今度は全部がずる

つと抜け落ちるまで腰を引いて、ひたすらその繰り返し。

しかも、俺の腰の高さに合わせてくれるわけでもなく、村上がかなり低めにそれを持つているため、自分で高さを合わせて腰振りをしていた。

つまり、全裸で両足を大きく開いて膝を曲げて——後輩二人の前で、ガニ股腰振りオナホール使用姿を晒していた。

「っああゝゝッ」

足元に屈んでいる二人は、俺がオナホールに陰茎を出し入れするところをかなり至近距離で見ている。そのことも恥ずかしくて仕方がなくて、顔中熱くたまらない。羞恥心で死にそうになりながらも、頑張っって前後に腰振りを続けていた。

「あれ、もしかしてイっちゃいます？俺たちに見られて、オナホで擬似セックスしながら？下部先輩って、意外とど変態なんですね」

「ちが、っあ……もお、イク……っ」

「腰へこ加速してるとこ悪いけど」

「おおっ……っ！」

絶頂を求めて、無意識に抜き差しが浅く速くなってきたところで、村上にオナホールを没収されてしまった。

今にも達しそうだったのに、突然目の前から快感を取り上げられて、もどかしい気持ちになる。後輩たちの前で、なぜか公開オナニーを強要させられているのに、このあたりから、完全に感覚が麻痺し始めていた。

「オナホ頼みじゃなく、自分でイきましょうよ。あ、でも手が使えないのか、困りましたね」

「別に手使わなくても出せんだろ」

「いやいや、どうやって?」

「ほら、腰振り続けろよ、センパイ」

「やっ……あっ、ん」

ぶるんぶるんぶるんっ♡ ぺちんっ♡

なぜか、村上の言う通りに、宙に向かってひたすら腰を振り続ける。

ガニ股の体勢のまま、オナホールもなにもないのに腰をへこへこ動かすと、陰茎が無様にぶるんと揺れた。時折、後輩たちにからかいの言葉をかけられると、それにすら反応して、勃起した陰茎がびくびくと震える。

当然、このような刺激では達することも出来ないし、二人に笑われるので、色んな意味で泣きたくなったところで、いよいよ俺は助けを求めた。素直に謝り、後輩たちからの許しを請う。

「や、あっ、本当に、やめてくれ……俺が、悪かったから……っ」
「……仕方ないですね」

上田のため息混じりの呟きに、解放してもらえないかもしれない、と心底安堵した——はずだった。

「僕ね、実は催眠術が使えるんです。下部先輩がありのままの姿を晒せるように、催眠をかけてあげますよ。僕の顔をよく見ててくださいね」

「や、意味がわから……やめ……っ」

「先輩の体、どんどん熱くなってきますからね。さっきオナホセックスしてたの思い出してください、ほら、気持ちよかったですよね？」

頬を両手で挟まれ、無理やり視線を重ねられながら、瞳の中をねっとり覗き込まれる。

催眠術とかなんとか。上田が何を言っているのか、全く理解が出来なかった

のに、数秒後には体が徐々に火照り始めたから驚いた。すごく不思議な感覚だった。

「なん、でっ」

「ね、体が熱くなってきたでしょう？ 特に、こことかやばいんじゃないですか？ 今やめて、本当に大丈夫ですか？」

「や、っあ……っ」

「このまま、ここ勃起させたまま帰ります？ 帰り道大丈夫かな、僕、下部先輩が心配だなあ」

伝い落ちるほど、カウパー液が滲み出た陰茎を、上田の指先が弄ぶ。つんつんと突かれると、思わず声が漏れてしまった。

「……ンっ♡」

体中、特に陰茎の熱の持ち方が異常だった。先端も竿も、なにもかもが熱くて、今すぐにもでも触れたくてしょうがない。思い切り抜きあげたら、どれだけ気持ちいいだろうかと考える。

